R-18

雷の女戦士図鑑3

寝所で睦かれる美女たちの自慰・レス行為……

若い兵士達を呼寄せ歓喜の乱交騒ぎ!

月神図鑑

ジュ○エッタ王女さまが異国の
「ぱじゃまぱーてい」という
風習をやってみたいというので、
カ○ラとイ○タは寝間着を持参して
カ○ラの部屋に泊まりにきました……

三人は浴場で互いに体を洗い
おしゃべりに花が咲きました
そして体躯を綺麗にしてから
火照った体をさましてから寝間着に着替えました

夜が更けても三人はファッションの事、
お菓子の事、吟遊詩人の流行歌、
旅芸人の話題の芝居の
ことなど……
おしゃべりの種は尽きずガールズトークに
熱中して、いつしか夜もふけて疲れて眠ってしまいました……

カ○ラはイオタ、ジュリエッタと楽しいお喋りを終え何時しか眠りについていた…

なんだか興奮して眠れない……

ドキ…

ドキ…

ムニュ♡

ドキ…

そっ

以前、三人で雷撃隊の隊士たちとの火遊び事を思い返しあの時の興奮がフィードバックされ肉体が昂揚して眠れなかった……強烈な自慰の誘惑に抗えなくなる……

皆もう寝てるよね……

カ○ラは二人の寝息を確認し火照った秘所に指をあてがう……

あん……
駄目え……
くふう……
二人を起こさないよう喘ぎ声を抑えるがつい漏れてしまう……
もみゅ
ツプゥ
もみゅ…
くちゅ…♡
カ○ラは右手で発育のいい胸をこねくるように揉み
左手で寝巻きをはだけ
股間のピンクの秘肉を
指で弄くり始めた……
こんな……
事しちゃ……
ダメなのに……
はぁはぁ……
あァん♡
ひっ……

くふっ……
ふぁっ……あっ
あぁン！
気持ち……
よく……
なっちゃう……
ようぅ……んん……
ピクン
ピク…
ムニュ♡
ムニュ♡
クチュ…
クチュ…
クチュ…
次第に指の動きが
早くなり
くちゅくちゅと
淫靡な水音が……
呼吸が荒くなり
頬が紅葉のように
赤く色づいてくる…
オナニー……
気持ち……
いいよぉ……

やちはぁん……
弄るよ……
だっ～と……
つけの……
イあんっ……
いにあの……
そっちたりだっ～ん……
うちやの……
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ヒクン
もう……
もう……
我慢の……あんっ
限界だよぉ……
プチュ…
クチュ…
ヌチュ…
カラの股間は
愛液でしとどに濡れ
目は虚ろに見開き
汗ばんだ肌に寝巻きが
張り付き
艶やかな表情で
絶頂寸前の熱い肉体が
痙攣し始めていた……

ビクッ！
ビクッ！
ぷしゅ～～～…
あぐぅ……
あっ、あぁ……
いやぁあぁぁぁ
あ～～～ん！
美しき女戦士のカラダは健康的な太腿を大胆にM字に開き、背中を海老のように仰け反らせ大量の潮を噴いていた……

ハァ…
ハァ…
ハァ…
カ○ラ
「はぅ～～ん
オナニー……
気持ち…あんっ
良かったのぉ……」
自慰の気だるい
余韻に浸る
カーラの耳元で、
イ○タ
「うふふ……
カ○ラってば
艶っぽ～～い
カワイイ～～」
能天気だが
熱っぽい声で
イ○タの声が
囁かれた……
ぴちょ～～～…
カ○ラ
「うえぇ……！
イ○タっ！
起きていたの？」

カ○ラ「もう～～～…イ○タったら人の自慰を覗くなんていけない仔猫ちゃんねぇ…」
ぎゅん…♡
フフ…♡
ムニ♡
ムニ♡
イ○タ「あぁん……だって、寝てたらなんだか色っぽい声が聞こえたんだもの……不可抗力よ……」
カ○ラ「罰としてイ○タのオナニー姿を見せてよ……」
イ○タ「ええぇ～～…そんなぁ……」
ジュン…♡

カ○ラ「うわぁ……イ○タのぷっくりお○んこ柔らか～い！」
ひゃァ…♡
んぁ…
ん？
イ○タ「ちょっと……あ、やぁん……そこは敏感な箇所なのに……」
ムニュッ
プル♡
カ○ラ「オナニー見せてくれないなら、このまま指を入れちゃうわよ……」
くちゅ…
くちゅ…

イ○タ「きゃあ……ひゃうん……ゆ、指が……カ○ラあ……入いっちゃってるよう……」
ヒアァ…
ダメェ…
ソラ…ソラ…
カ○ラ「なんだかイ○タが可愛くて苛めたくなっちゃった……」
ウリウリ……
イ○タ「しょんなあ～～～～…」
ぬちゅっ！
ぬちゅっ！
ぬちゅっ！
ピクッ！

カーラ「そうら……指が出たり入ったりしてるわよ気持ちいいかしら？」
ひゃァ♡
ちゅぱァ～……
イ○タ「うん……カ○ラの指が気持ちいいよ……キスしてぇ……」
カ○ラはイ○タの桜色をした唇に口付けをし舌を絡めて弄んだ……やがて二つの影が離れると銀色の糸が中空に結ばれ雫となって消えた……
チュプッ！
チュプッ！
チュプッ！
チュプッ！

イ○タ「やぁ……
イク……イクぅ……
イッちゃうよぅ……」
アハッ♡
ビクッ！
ビクン！
カ○ラ「あはぁ……
潮噴いちゃって……
なんて可愛いのぉ……」
ムニ♡
ムニ♡
プシュゥ～…
少女の股間から
大量の蜜しぶきが
溢れて虹が浮かぶかと
思われた……

カ○ラ「うふふふ……イ○タったらホント可愛い……」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
イ○タ「もう……カ○ラの意地悪う……知らないんだから……」
ジュ○エッタ「まあ……うふふふ……二人とも楽しそうですわねぇ……」
じゅわァ…
カ○ラ・イ○タ「えええぇ？王女さまっ？」

カ○ラ「こうなったら王女さまも仲間に入れちゃおう！」
イ○タ「わ～～い！王女さまのおっぱい！」
ジュ○エッタ「あらあら、二人ともおっぱいに吸い付いちゃって赤ちゃんみたいね……」
あぁ…ん♡
ちゅぱっ♥
ぺろぺろ♥

イ○タ「王女様のおっぱい大きくてふわふわの肉感だ～～さすがナイスバディですね…」
ジュ○エッタ「あん……二人とも……上手なのね……うふん……感じちゃうわぁ……」
カ○ラ「ペロペロ……もっと気持ちよくして差し上げましょうか？」
もォ…♡
ドキ
ドキ
ドキ
チュ～～♥
レロッ

カ○ラ「王女さまのアソコ……うふっ
もうこんなにグチュグチュですよ……」
ジュ○エッタ「きゃう……ん……そこは……
やあぁぁん……でも……
気持ち……いいかも？」
イ○タ「ちゅ～～ちゅ～～」
ん…… あん♥
チュッ
チュパッ
ツプッ…
クチュッ♡
レロレロ…

ふぁ…ひゃん♥
ジュ○エッタ「ひゃあん……胸もアソコもそんなに攻められたら……もう駄目なのぉ……」
イ○タ「ちゅ～～ちゅ～～」
チュパ～～♥
ぺロッ
ぺロぺロッ
クチュッ
クチュッ
カ○ラ「さすがの王女様も乳首と花芯の三点責めにはトロトロに蕩けてしまったようね……可愛い……」

ジュ○エッタ「ひゃあああああぁぁぁぁん！」
イ○タ「ぷはぁ……母乳も大噴射だよぉ～～」
カ○ラ「遠慮なく達してくださいませ……」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
プシュ～！
プシュ～！
プシュ～～…

ジュ○エッタ「はぁ～～はぁ～～女同士なのにとても気持ち良くなってしまいましたわ～～」
イ○タ「ちゅ～～ちゅ～～王女様の母乳♥美味しいよぉ……」
カ○ラ「母乳も愛液も私たちが全部舐めとって綺麗にしてあげますね♥」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ちゅ～♥
ぺろ♥
とろ～～～…

カ○ラたちは物足りなくなり、
深夜にも関らず雷撃隊の隊士たちを召集した。
もちろん、乱交のための相手要員のためだ……
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
むち～～ん♡
新兵A「こんな夜中に何かと思えば
こんな楽しい集いを
開かれておられるとは……」
カーラ「うふっ……
火照ったこの穴を
お前達の肉棒で
愉しませてくれよ……」
くぱァ……

カーラ「おおぉ……中々猛々しいモノを持っているじゃないか……」
オオッ♡
ゴクッ
新兵A「そりゃあ、憧れのカーラ隊長のお○んこを拝ませていただいたので勃起しないほうがおかしいってもんですよ……」
キ・ン・ッ！

新兵A「うおおおぅ……隊長の膣肉……
なんとも言えぬ柔らかさと温もり……
ぐちゅぐちゅのぬちゅぬちゅ……
思わず果ててしまいそうな心地よさです……」
アッ…
きゃん♥
カ○ラ「あひゃ……んん……ひゃうん……
やっぱり指でのオナニーよりも
男の陰茎の方がしっくりくるなあ……」
ぷるん!
ぷるん♥
ヌチュッ!
ヌチュッ!

カ○ラ「ひあああぁぁ……
いいぞいいぞ、もっともっと
子宮にノックする
勢いで突いてくれ……」

あん♡

あぁっ

んん……

ゆさっ

ゆさっ

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

新兵A「はい……突いて突いて突きまくります
おぉぉぉ……もう逝しそうだ……
カ○ラさんの柔肌に思い切りぶちまけたい……」

新兵A「もう…限界です……カーラ隊長おおおおおお……」
ビクッ！
ビクン
カーラ「いいぞぉ……スペルマいっぱい吐き出してええええ……」
ドクッ！
ドクッ！

新兵A「はぁ…はぁ……今夜もたっぷり堪能させていただきました……」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
カ○ラ「ふぃ～～～～中々の腰使いだったぞA……」
新兵A「本当ですか？ありがとうございます！」
どぴゅ
ろぴゅ……

カ○ラ「お○んちんプルンプルンさせて美味しそう……」
ドキ…ドキ…ドキ…ドキ…
新兵D「隊長が上になってくれるなんて……この角度から見る裸のカ○ラさんも美しい……そして、エロい……」
ぷち～～ん♥
プルン!

カ○ラ「あふぁん……んん……いいぞぉ……
硬くてゴリゴリしたペニスが……くふぁ……
あたしの膣内にズブズブと侵入してくる……」
アァ…ん♥
ピクン！
ムニ♥
ムニ♥
ヌププ…ッ
新兵D「おおおぉぉ……カ○ラさんのお○ンコは
膣肉の襞々が……亀頭に絡みついて……
堪らない……たまらないぞぉ……」

カ○ラ「よぉし……くふぁ……少しずつ動かしていくわよ……そぉれ……ぬぷぬぷぬぷ……」
くはァ…
んん…♡
ムニュ♥
ムニュ♥
ズチュッ…
ヌチュ…
ズプッ
新兵D「うおぉぉ……隊長が自ら腰を動かしてくれるとは……思わず果ててしまいそうな気持ち良さ……だけど、まだ我慢だ…我慢しなきゃ……」

新兵G「Dばかりズルイぞぉ……順番が待てない……カ○ラさんの素肌ににぶっかけてもいいですかぁ？」
新兵E「あぁぁ……自分もシコシコしたいです……」
新兵C「俺も俺も……」
カ○ラ「堪え性の無い奴だなぁ……しょうがないよ……奴等だ……ホラ……いいよ……あたしのハメてる姿見てシコシコしな……」
あふぁ…♡
ヌッ！
ヌッ！
ヌッ！
ヌッ！
ヌッ！
ヌポッ
ヌプッ
ヌチュッ
ズチュッ

新兵D「もう限界だぁ……カ○ラさんの膣内に果てます……」
新兵G「自分もカ○ラさんのおっぱいに精液を……」
新兵E「あぁぁ……自分も射精します……」
新兵C「俺もだ……」
カ○ラ「いいわぁ……キテキテキテ……あたしの膣内にもおっぱいにもお尻にも顔にもお腹にもスペルマぶっかけてぇ……」
ビクッ！
びゅくっ！
びゅくっ！
びゅくっ！
びゅくっ！
ドプッ

カ○ラ「あはぁ……んん……しゅごぉいのぉ……ザーメンぬるぬる……精液の沼に全身浸っているみたいなのぉ……あはぁ♥」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ムワァ…
新兵「カ○ラさんとのSEX気持ち良かった……」
新兵「俺も思いのたけをぶちまけたぁ……」
新兵FED「カ○ラさんがスペルマまみれでまた興奮してきた……」

新兵B「ごくっ……イ○タさんの桃のようなお尻
その中心にはぷっくりお○ンコが涎を垂らしている……
本当にいいんですか？ココに挿入しても？」
ドキ…
ドキ…
ドキ…
ハァ…
ハァ…
スチュ～…
イ○タ「うん……いいのよ……
こんな夜遅くに来てくれたんだもの……
気持ちイイ目にあわせてアゲル……」

イ○タ「はやく……早くあたしのお○ンコにあなたの膨張したお○ンポを突っ込んでぇ……もう…切なくて堪らないのぉ……」
ドキ…
ドキ…
ドキ…
ビクン…
ビクン…
新兵B「イ○タさんのピンクに色づくお○ンコに自分の○ンポを突っ込ませて頂きます！」

ブプププ…
ズチュチュ…
ビクン!
イ○タ「ひゃうぅん……くあっ……やっぱり……本物は気持ちいいのぉ……」
新兵B「イ○タさんの膣中……にゅるにゅるでぐちゅぐちゅで陰茎に絡んでくる……」

新兵B「うはぁ……お○んこの快感に加えて尻肉に当たって柔らかさを堪能できます……」
イ○タ「ホントぉ？イ○タのお尻肉にパンパン打ち当てて愉しんでぇ……あたしすっごい興奮しちゃうのぉ……」
パッ
パッ
パッ
パッ
パッ
パッ
ひぁ…♡
アン…♡

イ○タ「あぁぁぁん……ザーメン出ているぅ
たっぷりスペルマでイ○タのお尻を
汚しまくってぇ……」
ビクッ!
ビクッ
ドピュッ
ドポォ
新兵B「はいぃぃ……イ○タさんの丸くて白いお尻に
自分の白濁スペルマぶっかけまくりますぅ……」

イオタ「はぁ……はぁ……しゅごいのぉ……あったかザーメンがお尻もお〇シコも汚して垂れているのがわかるのぉ……」
ドロォ～～～
ドロ…
ゴポッ…
ゴプ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
新兵B「ふぅ……ふぅ……気持ち良かったぁ～～～イ〇タさんのお尻にワレメに白化粧されて最高にエロいですよぉ……」

イ○タさん……両手で脚を抱えてM字に開脚してください……
ドキ……
ドキ……
ドキ……
ぢ~~ん♥
よしよ……
こんな感じかしら？
やあ……
赤ちゃんみたいで
恥ずかしいなぁ……
パイ○タさんのクリお○んこ丸見えだぁ……
もう堪らない……

ゴクッ……
そんな目で見て……
なんだか怖いよう……
あん…♡
……えっ？
そうですか？
スミマセン、
欲望が先走った
おみたいで……
互いい気持ちよく
SEXをしましょう……
くちゅ…♡
ギシッ！

ひゃあぁぁ…あん…ひゃうん
あんっ
大丈夫ですイ○タさん……もっと、力を抜いて……
キュン…♡
ずぬ
プゥ…

きゃふぅ……んん……
いいのぉ……あなたの
おいっ○ンチン……
もっとも
突いてぇ……
ひゃぅ～～ん…
くはぁ……
イ○タさんの膣内
ぐちゅぐちゅの
ぬるぬるで……
射精してしまいそうだぁ……
ずぽっ
ずぽっ
ずぽっ
ずぽっ

はあはあ……
も、もう……
駄目なのぉ……
ビクン！
自分も限界です……
白い液体、いっぱい
射精しちゃいます……
びゅっ！
びゅるっ！
びゅくっ！

ふにゃあ～～ん……
いっぱいスペルマ射精しちゃったね……
なんだかポカポカするよ……
ハァ……
ハァ……
ハァ……
ハァ……
はぁ……はぁ……
自分も……
イ○タさんの人肌に触れて……
心がポカポカします……
ゆるぇ……

ジュ○エッタ「まあ、私のおっぱいで挟んで欲しいなんて可愛いお願いね……」
アハァン♥
パ
フゥ♡
新兵C「ありがとうございます！嗚呼……王女様のおっぱいはふかふかのムニュムニュでなんて気持ちいいんだ……」

新兵C「王女様のおっぱいでパイズリ……なんて高貴で柔らかいんだ……凄く興奮いたします……」
モォ…♡
ジュ〇エッタ「まあ……うふふふふ……殿方は本当におっぱいが好きなんですね……」
ムニュ ニュ…♥

ジュ○エッタ「ああ……凄いわぁ……私の乳房でお○ンチンがビクビク脈打っているの……」
ひゃうん…♡
新兵C「はい……王女さまっ興奮しちゃって今にもお○ンポが暴発しそうです……しかし、まだこの快楽を味わいたい……」
ヌチュッ♡
ヌチュッ♡
ヌチュッ♡

新兵C「嗚呼……もう我慢の限界です……王女様の乳房の中で思い切りスペルマを射精したいです……」
くふぅ…ん♥
ニュポッ♡
ニュポッ♡
ニュポッ♡
ニュポッ♡
ニュポッ♡
ジュ○エッタ「いいんですよ……貴方の我慢ザーメン思いのまま私の乳房に吐き出してくださいませ……」

新兵C「くはぁ……限界突破です……
それでは失礼致します……
うおおおぉぉぉぉ……」
ビクン！
ピクッ！
ドクッ！
びゅくっ！
びゅっ！
「ジュ○エッタ
あはぁ……んんぅ……
若い殿方の精液が……
いっぱい……飛び散って……
凄いですわ～～～」

ジュ〇エッタ
「んふぅ～～ん
凄い量の精汁ですね……
それに凄い牡の匂い……」
ア…
ア…
ア…
ア…
新兵C
「ああ……自分は守るべき
王女様になんて
不遜な事を……
でも、自分の精液でまどろむ
王女様の姿はなんて
刺激的で官能的なんだ……」

新兵C「今度は自分が王女様を気持ちよくさせていただきます……ああ……くおおぉぉ……王女様の太腿に挟まれただけでいきそうだ……」
ドクイッ！
あん…♡
モミ♡
モミ♡
ズヌ…！
ジュ〇エッタ「まあ……うふふ……期待してますよ……ああぁん…」

新兵C「うほぉおおぉ……これは凄い……王女様の膣内の中は……ぬるぬるのヌカルミのようで……この世にこんなに気持ちいい世界があったとは……」
ウホッ！
くあァ…！
ジュ○エッタ「きゃふぅ…んん……私の膣内に太くて硬いものが……侵入してきますわぁ……」
ムニュ
ムニッ
ズプププ…

新兵C「それでは腰を動かしますよ……性の本によると、九浅一深といって九回浅く突いて、一回深く突くと良いとか……」
うかっ…ん♡
ジュ○エッタ「まあ……そうですの？是非やってみて下さいまし…」
ムニュ
ムニュ
ヌチュッ…
ヌチュ…
ズチュ

新兵C
「そらそら……突いて、突いて、突いて、突いて、突いて、突いて、突いてぇ……奥まで突き刺す！」
ヌッチュッ
ヌッチュ
ヌッチュ
ヌッチュ
ヌッチュッ
ヌッチュ
ヌッチュ
モミッ
モミッ
パン！
ラ↑あぁ…ん♡
ジュ○エッタ
「あんあんあん……きゃふぅん！本当だわ……緩急があると……感じちゃう……」

新兵C「ううっ……王女様の…お○ンコ……気持ち良すぎて……精液がいっぱい噴出されます……くふぉおお……」
ビクッ
ピクッ
ビュッ！
ビュクッ！
アァァ…♡
ジュ○エッタ「私も感じちゃって……あんあんあはぁ……ん！」

新兵C「ふぅ～～ふぅ～～～～
なんて気持ちいいんだ……
王女様のヴァギナは王国一です……」
ハァ…
ハァ…
ジュ○エッタ
「はぁ～～はぁ～～
そんなに誉められると照れますわぁ……」
ハァ…
ぶるぶる
ろれ……

カ○ラ「ふふふふ……お○ンポカチカチに強張らせて……今気持ち良くしてやるからな……」
ウフフフ♡
んふっ♡
ぴくっ!
ジュ○エッタ「うふふふ……そうですわね、舌でペロペロすると殿方は面白いように喜びますわ」
新兵C「ああ……俺が小便をする所にお二人の綺麗な顔が息のかかる距離に……なんと勿体ない……」

カ○ラ「おほぉ～～～～！久しぶりの男の陰茎は目に沁みるなあ～～～」
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ジュ○エッタ「本当ですわ……男のフェロモンが最も顕著に醸し出されてますわ……素敵……ぺろぺろっ」
ペロロ…
ペロッ♡
新兵C「うわわわっ……お二人で同時に舐められるとは……！」

カ○ラ
「おおぉ……肉竿がビクンビクン脈打っているぞ…」
あんっ♡
ぴちょっ
レロロ…
ぴちゃっ
ん♡
ジュ○エッタ
「きっと私達のペロペロが心地よいのですね……？嬉しいですわ……」
新兵C
「嬉しいのはこちらの方ですふつつかな愚息を可愛がって頂いてありがとうございます……」

カ○ラ「ぴちゃぴちゃ……もう限界じゃ……ないのか？」
あはァん♡
ぴちゃ
ぴちょっ！
レロレロレロ
ジュ○エッタ「レロレロレロ……好きな時に射精なさって良いのですよ……」
ヤァあん♡
レロレロレロ
新兵C「おふぅ……しかし此処で射精しては……うくっ……ああぁ……もう駄目だぁ……」

カーラ
「あふぁあああああっ
あぁ……あんっ！」
ビクッ！
ビクッ！
ジュ○エッタ
「きゃふぅうう……ん
おセーシがいっぱい
ですわぁ……」
ドピュッ！
ドピュッ！

カ○ラ「ふふふ……凄い精液の量だな……禁欲でもしてたのか？」
ジュ○エッタ「うふふふ……本当に凄い量ですわ……素敵い……」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
新兵C「それはお二人に舐めて舐めしてって貰ったからですよ一人遊びじゃここまで射精ません……」
ぶるぅ～～～…

カ○ラ「ふふ……イ○タのおっぱい
やわらか～い♪」
あハァン♡
ウフン♡
イ○タ「も○う、カ○ラったら……」
むちっ～～ん♡
新兵G「カ○ラさんとイ○タさんの
丸いお尻がつい
ついも……」

カ○ラ「ほ～ら、あたしとイ○タのお○んこどっちから食べる？」
ウフッ♡
イ○タ「もちろん、あたしからよね？」
アハッ♡
新兵G「ごくっ……両方のヴァギナを味わいたい……」
ヌッ！
ムムムッ～～～ッ♡

あん♡
あぁん♡
カ○ラ
あん……
そうきゃ
きたかぁ……」
イ○タ
ひゃう～ん……
嬢々が擦れて……
感じちゃうよぉ……」
ムニュ♡
ツプッ！
ヌチュチュ…
新兵G「こうすればお二人同時に味わえる……
くほおぉぉ……亀頭に絡みついて……
思った以上に感触が良いいですぞぉ……」

あんっ♡
くふぅ♡
ムニュ♡
ヌチュッ♡
ヌチュッ
ヌチュッ
「カ○ラ
「ア○っ……ひゃう！
くはあぁぁぁ……」
イ○タ
「くふぅ……んん
感じちゃうよぉ……」
新兵G「おほおおおぉぉぉ……
これは病みつきになりそうな
ダブルお○んこファックプレイです…」

びくっ
びくっ!
カ○ラ「きゃあああ!
しゅごぉ〜い!」
イ○タ「ぶっかけてぇ…」
ぶっぱい精液
ドピュッ!
ドピュッ!
新兵G「もう…限界です……
精液いっぱい射精するぅ……」

カ○ラ「はぁ～～はぁ～～凄い量ね……」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ムニュ♡
イ○タ「良かったぁ……部屋中に栗の花の匂いがするよぉ……」
新兵G「嗚呼……ダブル美女の襞々花弁の快感は感触も視覚的にも最高ですぅ……」
どぴゅ～ぅ…

カ○ラ「最後に三人一緒に性交しましょうか……」
ドキ…
ドキ…
イ○タ「ふふっ……いいわねソレ」
ドキ…
ドキ…
ジュ○エッタ「うふふふ……隊士の皆さん好きなお尻にハメてくださいね……」
ドキ…
ドキ…
むちん♡

新兵A「まぁるいお尻が三つも並ぶと壮観であります！」
カ○ラ「なんだい……早くハメて欲しいのに……」
あん…♡
イ○タ「そうよそうよ早くぅ～～～！」
スゴ…♡
ジュリエッタ「私もですわ～～」
まァ…♡
新兵B「これは目に焼き付けておかないと！」
ズイッ
ズイッ
ズイッ

カ○ラ「にゃうん……やっぱり本物のお○んちんは効くわぁ～～～～！」
新兵A「カ○ラさんのお○んこ吸い付いてきます……」
んん…
イ○タ「あたしもあたしも～～～」
きゅう！
ジュ○エッタ「お○んちん挿入したり抜いたりしてくださいね～～～～～」
アん♡
ヌププッ…
ズリ…ボッ…
ズルプッ

新兵E「順番を待てない……素肌にぶっかけてもいいですか？」
アア……♡
カ○ラ「いいぞ……スペルマぶっかけてえ…」
ヒアん♡
イ○タ「あん……ペニスがいっぱい…」
くふぅ♡
ジュ○エッタ「ザーメンいっぱいかけて下さいね……」
新兵G「勿論でありますぅ～～」
ヌッ
ヌッ
ヌチュッ
ヌチュッ
ジュプッ
ジュプッ
ズチュッ
ヌッ
ズチュッ

カ○ラ「きゃうぅぅぅ……ん！」
ビュッ
ドプッ
びくっ
イ○タ「あ、あつぅ～～い！」
びくっ
ビュッ
ドプッ
ジュ○エッタ「凄い精液の量ですわ～～～」
びくっ
ビュッ
ドプッ

新兵A「いや～～～
興奮しました……
気持ち良かったです……」
カ○ラ「そうか……
しかし…凄い量だな」
ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
イ○タ「ベトベトぉ～～～
でも癖になりそう……」
ジュ○エッタ「精汁の匂いに酔ってしまいましたわぁ～～」
ぶるん
ぶるぅ…
ポタ…
ポタ…
ポタ…